文窓

ふみのまど・fumi no mado

神戸大学文学部 同窓会 文窓会
事務局：〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
TEL&FAX 078-806-7207（水曜日11時～16時）
https://www.bunsokai.com/
連絡用メール：bunsokai@gmail.com
文学部：総務係 TEL 078-803-5591 FAX 078-803-5589
教務学生係 TEL 078-803-5595
http://www.lit.kobe-u.ac.jp

22号
2024.9.30

特集／私の現在地

追悼「眞方忠道先生を偲んで」

●文窓会からのお願い p3
●卒業生アンケート（抜粋） p9-11

文窓会ホームページの URL がシンプルになりました！
https://www.bunsokai.com
スマートフォンでも文窓会ホームページへ！右の QR コードを読み取り、画面に出る指示に沿って操作するだけ。
スマートフォンはこちら▶▶▶

注目！文学部の新しい動き

人文学研究科長・文学部長
白鳥　義彦

2024年4月より人文学研究科長・文学部長を務めることとなりました。フランスを中心とする社会学を主たる専門としています。

最近は30年ぶりの円安ということがニュースになっています。30年前というと、私がパリに留学していた頃（ついこの間のことのように常々感じているので、30年が経っているというそのこと自体驚きですが）なので、こうしたニュースに接すると、30年間でぐるっと回って元に戻ったような感覚になることがあります。とは言え、「失われた10年」が「失われた30年」となり、国立大学の法人化が20年前の2004年になされているように、30年という時間は確かに経過し、元の同じところに戻ったわけではもちろんありません。

文学部の時間の流れは、世間の時間の流れよりはゆったりとしているのかもしれません。文学部は、哲学、文学、史学をはじめとする伝統的な学問分野を土台とすることを大切にし、人類の叡智の蓄積としての古典と現代的問題を結びつけて考えながら、広く人間について考えるということを旨としています。古典は常に立ち戻るべき拠りどころです。ところで、その拠りどころの上に、企業との連携を図る、これまでにないいくつかの新しい動きも文学部で生まれてきています。一つは、株式会社島津製作所と、文学部の神戸オックスフォード日本学プログラム (Kobe-Oxford Japanese Studies Program、KOJSP) および神戸雰囲気学研究所（Kobe Institute for Atmospheric Studies、KOIAS）との共同事業です。この事業では、社会にとっての、また働く場にとっての Well-being ということについてオックスフォード生を交えて考えたり、「雰囲気」ということを様々な観点からとらえようとしたりしています。もう一つは、工学部・工学研究科と、阪神高速道路株式会社との共同研究です。これは、2030年ごろ完成予定の、バイパスとして新たに整備される大阪湾岸道路西伸部の六甲アイランドとポートアイランドとを結ぶ海上長大橋を取り上げて、学部生および大学院生が参加する授業の形で行われています。今年度は「神戸港にかかる海上長大橋の社会的意味を考える」をテーマとしています。こうした新しい動きは、「現代的問題」に取り組む具体的な例としてとらえることができるでしょう。

こうした活動を通じて感じるのは、現場とは異なる視点を求めて、企業などからの文学部への期待が実はとても大きいということです。世間とは異なる時間の流れのなかで、本質を見極めようとする文学部ならではのあり方が、こうした期待の背景にあるように思います。これからも文学部らしさを大切にしながら、教育研究を進めていきたいと思います。また日々の教育研究を行うなかで、文窓会の皆様には、日頃からご支援を賜り、大変感謝しております。これからも温かいご支援やご協力をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

次世代の文窓会を願う

文窓会会長
武藤　美也子

皆様お元気でお過ごしでしょうか。いつも変わらぬ文窓会へのご協力、ご理解を感謝いたしております。

2023年度は HCD で懇親会を開催し、そして卒業生祝賀パーティもようやく開くことができました。卒業生たちの晴れやかな顔を見ながら、社会への旅立ちを見送りました。

その時「あなたが、神大文学部での学びで得た最大のものとは何でしょう？」というアンケートを書いてもらいました。

一部をあげますと「一つの学問を様々な学問分野から深めた経験から多角的・多面的な視点を養えたこと」「・物事を多角的に見る力　・様々な考え方を許容する力　・自分の考えを論理的にわかりやすく説明する力」「自分の知らないもの、未知の領域に対してひたすらに知ろう、学ぼうとする探求心です。」

これこそが文学部で学ぶ多様性への視点であります。我々の後輩たちはしっかりと文学部の伝統を受け継いでいます。このアンケートは別ページで、抜粋して報告していますので、お読みになってください。

悲しいお知らせとしては眞方名誉教授がお亡くなりになりました。先生への追悼文を教え子の皆さんに書いていただきました。薫陶を受けられた多くの方がいらっしゃると思います。皆様とご一緒にご冥福をお祈りいたします。

私は2014年に会長になり。今年で10年目となります。役員の高齢化が進み、文窓会の今後が心配になってきております。文窓会の現状を報告しますと、

- 役員（10名）の内、3，4年後には、大学教員役員を除き、ほとんどが80歳超になる。
- 長年、会長はじめ全員で、新役員の補強を図ってきたが、現在候補者はない。
- 今の体制は3，4年が限度だと考えられる。

今後の文窓会の継続について、真剣に考えなければなりません。お友達と一緒で結構です。母校の同窓会を助けてやろうと思われる方は事務局にご一報ください。ご協力をお待ちしています。

会計報告を最終ページに載せております。それをご覧になると2023年度の会費納入金が異常に少なくなっております。これは校友会が一括して入会金を集めることになり、その文窓会への入金が6月になるため2023年度の収支報告書には入らないからです。今年は入学金との一括納入で納入率が上がりました。ありがたいことです。それに見合った同窓会活動を行なっていけるように頑張るつもりです。

今後も皆さまのご期待に応えられるよう頑張っていきます。引き続いてのご協力と応援を切にお願い申し上げます。

2024年6月記

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第18回 文窓賞 2024年

学生レポートコンクール結果発表

今年の応募は９作品。１年生を除くと、芸術学が１名、あとの５名はすべて文学専修の学生でした。８月５日に審査委員会が開かれ、優秀賞３作と少し変則的ですが、受賞作品は下記の通りです。

優秀賞（表彰状と賞金5万円）

「『いつか』の文学部」　四ツ橋 明里（あかり）（ドイツ文学4回生）

普通に食事ができない、手を洗うことを止められない。家族の生活もこわし続けている。生きている限り情けない自分から逃げられないと思う反面、入退院を繰り返しても、遠回りをして手に入れた大学で文学を学びたい思いは消えない。苦しさの中でも、必死に夢を追いかける姿は読む者の胸に突き刺さる。

幼いころからの憧れ、自由な夢の場所に戻って作品を書き続けてほしい。次の作品を期待しています。

優秀賞（表彰状と賞金5万円）

「信じる」　北條 康弘（国文学4回生）

コロナの中、戦争や悲惨なニュースを見続ける。人間不信になり、将来への希望も抱けなかった。しかし、それが逃げだとどこかで気づいていた。夢や希望を抱かなければ、裏切られることもない。学ぶ中で、人文学の素晴らしさを確信する。「信ずる」ことで教育実習での体験、受けた言葉が血となってくる。

教師となり、熱い思いで、社会を変えていく人を育ててほしい。

優秀賞（表彰状と賞金5万円）

「山と海のあいだ」　住井 和剛（かずたか）（1回生）

歯科医院の跡取りとして、医科歯科大を受験・合格した作者。しかし心の中のもやもやが消えることなく大学を退学し、昔から行きたかった文学部に入る。「矛盾」を許さない自然科学的アプローチに疑問を抱いたからである。「矛盾を矛盾のまま見つめ、受容し、新たな解決策を探ること」で社会を探求する決意だ。

先の見えない中、自然科学アプローチに加え、より柔らかで深く考える人文学的アプローチが不可欠だ。

新人賞（表彰状と賞金1万円）

「夏休み、わたしは旅に出る」　熊谷 孝太（1回生）

新人賞（表彰状と賞金1万円）

「何かを伝えるということ」　足立 彩佳（あやか）（1回生）

選考を終えて

今回の９作品は、人文学を学ぶ意味や葛藤、文学部の存在意義につき深く、しっかり考えた作品が占めていました。次回は、審査委員を驚かせてくれるようなユニークな作品にも出会いたい。　（文責　審査委員長　西川京子）

選考委員

白鳥義彦研究科長（社会学 教授）　中畑寛之副研究科長（フランス文学 教授）　佐藤昇副研究科長（西洋史学 教授）
武藤美也子　三宅征彦　廣野幸夫　吉田浩次　中川伸子　津田薫　梅村麦生　西川京子　（計11名）

文学部が動き出す！新しい風が吹く！

- 雰囲気学研究って？（株）島津製作所、KOJSP ともコラボ！
- 神戸港にかかる海上長大橋とは？工学部や阪神高速道路（株）と共同研究！

文窓会にも新しい風を！チカラお貸しください！

ゆるやかな繋がり、文窓会の運営に協力いただけませんか。
ご連絡・お問い合わせは下記へ！

TEL&FAX：078-806-7207（水曜日 11:00 ～ 16:00）　E-mail：bunsokai@gmail.com

30歳を迎える今

伊石 昂平（西洋史専修　2017年卒）

2017年に神戸大学文学部西洋史専修を卒業後、4歳から始めたチェロを学ぶために東京藝術大学大学院音楽研究科器楽専攻修士課程に進学。3年間の学びを終え、2020年3月に修了。藝大在学中、第72回全日本学生音楽コンクールチェロ部門大学の部全国大会にて第1位、併せて日本放送協会賞、かんぽ生命奨励賞を受賞。ザルツブルク＝モーツァルト国際室内楽コンクール2020第1位。現在はフリーランスのチェロ奏者、指導者として活動中。

『文窓』に寄稿させていただくのは二度目となります。一度目は2017年、私が神戸大学を卒業した年でした。その時は神戸大学での学生生活、そして藝大受験に至る思いを寄稿しました。あれから7年、今年30歳を迎える年にこうしてまた寄稿できることは、自分自身を振り返る良いきっかけとなりました。

まず、久しぶりに「文章を書く」という作業をする中で、自分がかつて文学部生であったという記憶が鮮明に蘇ってきました。そしてありがたいことに、在学中は二度も文窓賞をいただいており、そのことも懐かしく振り返ることができました。現在の私は日々、文字ではなく音符を読んでいます。そしてペンではなく楽器(弓)を持ち、音で表現しています。課題や卒業論文に追われ、毎日文章を書いていた神大時代を思いながら寄稿させていただきます。

何とか藝大大学院に合格した私は、すでに演奏家として第一線で活躍している藝大院生と比べて、音楽的知識もさることながら、取り組んだ楽曲が圧倒的に少なく、周りに追いつくために寝る間を惜しんで練習しました。その甲斐もあり、在学中には学生音楽コンクールで第1位をいただくことができました。藝大での3年間は本当に短く、あっという間でしたが、学ぶところの多い仲間たちに囲まれた刺激的な日々は、私を音楽家として大きく成長させてくれました。

そして私が学生生活を終え、社会への第一歩を踏み出したのは25歳の時、2020年の4月でした。つまり新型コロナウィルスが世界を震撼させた時です。私はかねてよりモスクワへ留学したいと考えていました。それは、神戸大学で書いた卒業論文「ソ連の作曲家 D. ショスタコーヴィチの実像」を基盤に、東京藝術大学ではショスタコーヴィチの楽曲に焦点を当てて更に探求したからです。藝大卒業後はショスタコーヴィチの母国、ロシアで研鑽を積む計画でした。しかしその計画は見事に頓挫し、緊急事態宣言の中、マスクに命を預けるかのように息をのんで生きる毎日が始まったのです。

まだしばらくは学生をするつもりだった私は、言うまでもなく社会人としても音楽家としても未熟です。さらにコンサートなどの音楽活動はウイルスを拡大する要因として中止を余儀なくされ、演奏の仕事はゼロに。社会人第一歩は、東京で一人暮らしをしながら生活苦に喘ぐ日々となりました。(コロナ収束後もウクライナ侵攻をきっかけとする政情不安のため、留学は保留中です。)

コロナ禍の中、音楽の道を諦めることも考えました。そして、音楽以外に自分には何があるのか、何ができるのか、音楽を切り捨てたら自分には何が残るのか、そんなことを日々考えました。しかし、幼いころから積み重ねてきた音楽への思いは私自身の根幹となっており、やはりこの道以外に選択肢はないという思いに至りました。

現在はコロナも収束し、ありがたいことに少しずつ演奏する機会をいただけるようになりました。自身のソロやアンサンブルでの活動の他に、東京や大阪のプロオーケストラに客演で参加しながら全国各地を公演で回り、地元大阪では音楽教室を持ち、後進の指導にもあたっています。

コロナウイルスが蔓延したあの2020年は、自分の人生を見つめ直す時間だったと思っています。私はこの道を選んで後悔していません。好きなことを仕事にできることは、かけがえのない幸せだと思うからです。これから先、困難な時代が訪れても、音楽を心の支えとし、またチェロの持つ温かい音色で皆さまに癒しを届けられる演奏家を目指したいと思います。

テヘラン大学 2年間の留学から帰国 :近況報告

角田 哲朗(東洋史学専修・2015年卒業)

皆さま。お久しぶりです。2014年度卒業の角田哲朗です。確か、卒業直後の2015年に『文窓』への寄稿をしたと記憶しており、二度目の寄稿となります。一度目の寄稿から9年が経過しましたが、当時は9年後も未だに学生を続けているとは思っていませんでした。私は卒業後に京都大学文学研究科西南アジア史学研究室に進学し、現在は博士論文執筆中の身にあります。私は2022年4月から24年4月末まで丁度2年間、イランはテヘラン大学に留学しておりました。この文章を執筆している現在は帰国から1ヶ月ほどが経過しています。今回は「海外で活躍している卒業生」ということで依頼されましたところ、海外での「活躍」は既に終えている立場ではありますが、近況を報告致したいと思います。

私が取り組んでいるテーマは「中世末期イランにおけるメシアニズム運動とその思想的展開」です。具体的に言えば、14?16世紀のイランでは、我こそが救世主だと主張して政治運動を繰り広げた宗教指導者が断続的に発生しており、彼らの自書から彼らが救世主を自称した理屈を析出することを試みています(我が研究内容について饒舌に語りたいところだが紙面の都合上割愛)。この一環で、ペルシア語能力の向上と史料収集のため、イランに修行に行って参りました。留学計画を立てた3年前は、博士課程の院生らしく、私生活は全く彩りを欠いており、半ば捨て鉢に2年間の長期留学の予定を組んでしまいました。幸いにもテヘラン大に研究生の身分で受け入れてもらい、2年間研究に邁進することができました。目標だった史料収集も果たすことができましたが、予想していた通り、同地での留学生活では予想外のトラブルの連続でした(大規模デモやガチ路頭迷い、イスラエルの攻撃などがあったが割愛)。

現地での生活では、驚いたり肩透かしを食らったり、通り一遍のことを経験しました。その中でも、留学で鼻っ柱を折られる経験は最も重要だったと思われます。日本に居た頃は、私も大学院生としてそれなりに学識を身につけ、ある程度は自分の立場を確保していました。ところが、留学が始まると、ペルシア語での会話もおぼつかない30代男性として、イラン人からはキッズ扱い(ペルシア語で???)される訳です。心の中では「写本やったらお前よりキッチリ読めるんやぞ」と思いながらも、これまでの10年間(10年間 !?)に研究生活で築き上げた一切が通用せず、改めて入門者の立場に置かれる屈辱。己の心を守りながら新たなことに挑戦するバランス調整。頑張りました。

研究面では、現地の図書館にて、博士論文執筆に必要な写本データを入手することが必要でした。しかし、私の研究テーマは現在の政府にとって好ましくない「異端」信仰に関わっており(イスラーム研究における「異端」概念の是非に議論があることは承知だがここでは割愛)、実際に図書館で閲覧までなら許可されても、データの購入は却下されることがままありました。特に、私にとって必要な作品が魔術書と合本されている場合もあり、「オカルト関係のものは見せられない」と十把一絡げに申請を却下されることも。それでも、却下された図書館とは別の図書館に赴き、同作品の別写本のデータを入手できたので、運良く必要最低限のデータは入手できました。どうやらイラン政府はこうした怪しい写本の閲覧を厳しく制限していく方針であり、ギリギリのタイミングだったようです。これぱかりは現地に留学した私の特権であり、今後は苦労して入手した写本データというアドバンテージで逃げ切りたいと思っております。

本当は研究内容のお話がしたかったのですが、紙幅が足りません。その部分は今後出版される拙稿をご覧頂くか、あるいは直接連絡ください。お話しましょう(特に同級生諸君)。

昔は朝型だった

徳宮 俊貴
（社会学専修・2017年卒、2023年博士課程後期課程修了）

野球の大谷翔平選手と同い年なんですと自己紹介すると、すごいですねとよく言われる。当然ながら、すごいのは大谷選手であって私ではない。幼少期から具体的な目標を立て計画を実行し夢をかなえた投打二刀流のMVPメジャーリーガーであって、小学校の卒業文集で、基礎体力をつけるため中学・高校では運動部に入ると書いたのに吹奏楽部に所属し、専門バカになりたくないから高卒でフリーターになって“社会勉強”をするのだと宣言したくせに気づけば博士号まで取得していた気まぐれ大学教員ではない。

博士課程修了後もポスドク研究員として留まり、義務教育よりも長い年月を過ごした学び舎をついに去り、4月から社会構想大学院大学という東京メトロ表参道駅徒歩1分に立地する社会人向け専門職大学院に勤めています。学生は全員、自分より年上の会社員。仕事終わりの18時30分から2コマ（3時間）連続で開かれる少人数授業を真剣に受講される姿にこちらも熱が入る。夜遅く満員電車に1時間弱ゆられて帰宅し、未明に寝て昼前に起き、大学に着いたらまず遅めの昼食をとるという学生時代からあまり変わらない生活リズムのなかで、ときどき土曜日の午前に仕事が入ったりして早起きすると、やわらかい陽射しに朝を思いだす。そうして2ヵ月半が過ぎたところです。

就職と同時に一人暮らしが始まりました。引越し先の神奈川県川崎市は、多摩川をはさんで東京都に隣接し、23区へのアクセスにも適したまさにベッドタウン。閑静な住宅街や隣駅のショッピングモールや小学校の図書室に併設された市立図書館の分室や酔っ払いどうしのろれつの回らない口論など、西宮市出身で関西どころか兵庫県（どころか阪神間）から出たことのなかった私にも“見慣れた”景色が広がっています。ただ、実家周辺一帯のマンモス団地が高齢化を迎えているのに対し、こちらは若い世帯がまだ多いようで、昼過ぎに家を出るとランドセルを背負った小学生やテスト期間中の中高生とよくすれちがいます。そのあいだを介護サービスの送迎車がすりぬけていく。

自宅のすぐ前を流れる小川の両岸の、ふだんは運動部と思しき中高生や健康が気になりはじめた中高年がランニングをしている程度の人通りの少ないせまい車道は、約1kmにわたって250本ほどの桜並木が続いていて、花見シーズンだけ歩行者であふれかえります。祭りも毎年開催されているようです。けれども桜といえば、やはり神戸大学文学部の中庭でしょう。入学した年はちょうど満開。博士学位記授与式の日は大雨。そして今年はニュースになるほど全国的に開花が遅く、最後に一目みることがかないませんでしたが、新年度を迎えるたびに幾度もながめてきた桜と六甲山と晴天の見事なコントラストは鮮明に焼きついています。

在学中は、軽音Ⅱ部と通称される、もと第二課程（夜間学生）の軽音楽部に所属していました。その最大の活動が厳夜祭での野外ライブです。おそらく、夜間主コースの新規募集は当時すでに停止しており、私たちがオールナイトの厳夜祭を知る最後の学年ではないかと思います（私自身はライブの撤収作業のあとすぐ帰りましたが）。六甲おろしの吹く11月の夜に（近隣住民のご理解を得たうえで）演奏をするという、もうどこの大学でもできないかもしれない貴重な経験です。練習でよく利用していたのが三宮のStudio 246 WEST。24時間営業で、終電でスタジオに入って始発で帰る「深夜練」も今となってはいい思い出ですが、246という店名は国道246号にちなんでいるそうです。その国道246号（青山通り）と都道413号（表参道）が十字に交わるのが、表参道駅のある表参道交差点。そう、現在の本務校の所在地です。どうやら私は「夜」とご縁があるようで。

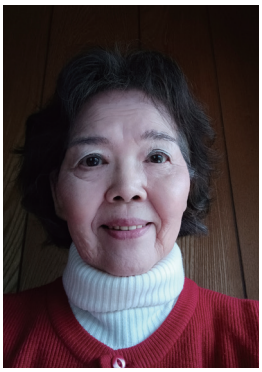
駅近の好立地とデスクワーク中心の業務にかまけて運動不足が気になるこのごろ。小川沿いにランニングでも始めようかと考えています。昼間は暑いので休日の夜に。しかし、それを作文に書くということは……。はたしてこの専門バカは本当に走るだろうか。

同窓会文集40年続けてます！

涌嶋 佐知子（英米文学専攻・1969年卒）

大学紛争で卒業式のない卒業をしてから55年経ちました。あの紛争で覚えているのが、専攻の部屋の壁にいっぱいアジテーションのスプレー書きをされて、私の記憶ではピンク色（水色説もあり）のペンキと刷毛を買ってみんなできれいに塗った事くらいです。卒業して翌年の1970年は大阪万博で世の中、高度経済成長期でした。その後結婚して大阪府内にいましたが、狭小住宅でもう少し広い家に住みたいと、40年前に三重県伊賀地方に引っ越してきました。当時都会に比べたら色々不便なことはありましたが、自然がとても美しく、毎日が気持ち良くゆったり暮らして今に至っています。でも、大学の同窓生となかなか会いにくくなったので、文章を持ち寄って文集を作って紙上同窓会をしようと呼びかけました。内容は自由、近況報告から最近読んだ本とか世相を切る意見（?）とか学術論文（?）でも何でもOKということにしましたら、さすがわれら17回生は素晴らしい‼　ほとんどの人が参加してくださって、皆さん文章が上手い‼　そしてバラエティに富んだ、それはそれは素敵な同窓会文集ができたのです！　勿論最初は手書きコピー文集です。ワープロもパソコンもそのうちの時代でした。好評に付きこれは続けていこうということで、体裁もB5版に揃えて、編集も当番制にし、毎年秋は文集の季節になりました。昨年なんと第40号を数え、よくぞ続いたと思います。勿論この間には色々な事情や思いを抱えた方もあったり、もう文集は卒業という方も、悔しいのは天に召された方がお二人いて、現在は参加者がかなり減っていますが、まだまだ出来るだけ続けようとしています。

40年間の文集に、さて私はいったい何を書いてきたのか読み返したら、最初の5、6年は「隣の空地にコスモスとススキが揺れてます。白い綺麗な猫を拾いました。」なんてお気楽主婦の戯言でしたが、7年目から突如テーマが環境問題のオンパレードとなりました。自然環境のきれいな地域に住み始めたら、この美しい環境は守らないといけないと気付いたようです。その頃（平成初め頃）地域でも立ち上がった川を守る環境市民団体（今は川の会・名張）、生協の環境委員会、廃食油（家庭で使い古した天ぷら油）リサイクルの会（約30年活動後3年前に役目を終えて終了、市のリサイクル収集品目に廃食油を加えることが出来たのは全国的にも結構珍しく誇れる事です。）等々に参加して毎日のように出かけていましたから、当然文集には毎年これらの羅列でした。例えば、牛乳パックリサイクル（平成2年これが始まりです）、生活排水関係から単独浄化槽・合併浄化槽・公共下水道、合成洗剤から界面活性剤・石けん、ゴミ減量の3R（Reduce, Reuse, Recycle）、原発高レベル放射性廃棄物、RDF事故、水質調査法としての透視度・パックテスト・BOD・COD・水生生物調査、ゴミ焼却炉等々、およそ文学の香りの薄い（?）読むのに疲れるものでしたが、自分が勉強して活動した事を偉そうに書いてました。



活動の対象はあくまでも普通の市民として出来る事、少しでも環境保全に役立てればで、大した事はしていないのですが、それでも親子水生生物調査会を長年続けて県から環境賞を貰ったり、この地域に流れているシャックリ川という変な名前の小さな汚れた川のマップを作って東京でプレゼンして、パフォーマンス賞を頂いたりしました。（伊賀から来たので私、全身真っ赤なくの一忍者にコスプレしました。）　環境問題と共に阪神淡路大震災や東日本大震災とかの大きな災害や自身の体調にも触れていますので、文集は私にとっては年代史です。残念なのは、最近の地球規模の気候変動や、終わらない戦争等、SDGs（Sustainable Development Goals）すなわち「持続可能な開発目標」には程遠い現状ですね！

昨年40号を刊行した
「英米文学専攻17回生 同窓会文集」

国海伸彦、ここに在り。

信川 智彦
（フランス文学専修・2014年卒、
2017年博士課程前期課程修了）

「せっかく大学院まで行ったのに、そんなことして。」

そう電話越しに母が言ったのはつい先月のことだ。

2年前、わたしは俳優活動を始めた。無論サラリーマンは続けている。

「どうしてフランス語を使う仕事に就かなかったの？そもそも、将来のことを考えたら英語の方が良いって、わたし言ってたでしょ。」

入社して7年が経った今、おやすみも英語で言えないような母に小言を言われる。

本業はシステムエンジニアだ。文系なのに。配属が決まったとき、私も同じようなことを思った。四角い眼鏡をかけているからだろうか。世の中は未だ偏見に満ちている。職業を明かすと皆こぞって「やっぱり！」と曰う。理系だと思われていたようだ。それからわたしは丸眼鏡をかけるようにしている。配属初日、ソースコードというものを前にして、会社を辞めようと思った。研修担当の人間も「英語に近い言語だから、まずは読んで見て」と言い放ち、自分の仕事に戻る始末。しかし、早速見限られたと思うと悔しかったので、とりあえず言われた通り読んでみることにした。しばらくするとどこか懐かしい気持ちになった。ソースコードの各行がどのように機能するのか読み解くために、その処理が定義されているメソッドやライブラリを遡って参照する。その遡るという行為が、大学で詩や小説を読み解くために繰り返してきた語源を遡る行為と重なったのだ。それから7年、今も変わらずソースコードを読んでいる。一見関係が無いように思える文学研究とシステムエンジニアの仕事も、見方によっては繋がるものだ。

フランス語も、俳優を始めてから偶然使う機会が訪れた。昨年、国内のある映画祭に参加した際、懇親会に同席したカナダ出身の映画監督の通訳をその場で行うことができた。

経験がいつどのような場所で活かされるかは分からないものだ。

パリでの留学中、友人に『クレールの膝』を初めて見せられてから、エリック・ロメールにえらく執心したことがある。ちょうど今年、好きな映画監督がロメールであるという共通点から、ある映画監督の自主短編映画に出演することができた。その映画監督とは生年月日が同じ1991年9月13日でもある。そしてその日は、数年前にゴダールが死んだ日にもなっていた。一体なんの因果か、生まれた日さえ、映画と繋がることになったのである。

我が人生の点と点の繋がりを目に浮かべながら、母には決して分かり得ない物だろうと、またどこか懐かしい優越感のようなものを抱いていた。自分だけの秘密を得たような感覚。それは大学で初めて詩を研究し、レポートを書いた時に抱いたものではなかったか。自分が初めて見出したと思ったその繋がりがいかに安直で脆いものであったかは、すぐに思い知ることになったのだが。それでも確かに、自らの手で、点と点を、言葉と言葉を、言葉と人を、社会を結びつけることで、テキストの世界を再構築していく楽しさを学べることは、文学部の醍醐味だったと思う。

そして俳優という仕事も、脚本に記された必要最低限のテキストと現実、役と自分を結びつけながら、映画の世界を構築していくものだと思う。文学研究で培ったテキストの解釈力や、言葉と意味の関係を深く理解する能力は、作品世界やキャラクターの内面を探求し、表現する際に活かされているのである。

と、書いてはみたものの、結局はいい歳こいて母親に諭された売れない俳優による拗らせエッセイ以外の何物でもない。いつか「国海伸彦(くにみのぶひこ)」という芸名が日の目を見た時に発掘されることを願って、遺しておきたいと思う。嗚呼、恥ずかしい。

読んでくださってありがとうございました。

モダンダンスと私の願い

藤田 かよ（佳代）（社会学専修・1966年卒）

私はモダンダンスをしています。モダンダンスをご存知でしょうか。

クラシックバレエから派生したとも言われていますし、説明するのに一番分かりやすいものは学校の授業でやった創作ダンスだと言う人もいます。私は絵画に例えるなら抽象画、文芸で言えば小説ではなく詩や俳句のようなもの、と説明したりもします。

訓練の方法には、クラシックバレエの基礎とモダンダンスのメソッドを取り入れています。小学6年生以上になったら、じぶんたちで踊りを創る訓練も始めます。

年間行事としては、毎年10月に発表会を開催しています。今年は兵庫県立芸術文化センター阪急中ホールで開催します。ぜひ、見にいらしてください。

今回は「きょうのそら」という作品を発表します。今日の空を見上げて、季節の草花と鳥が話している、という内容です。

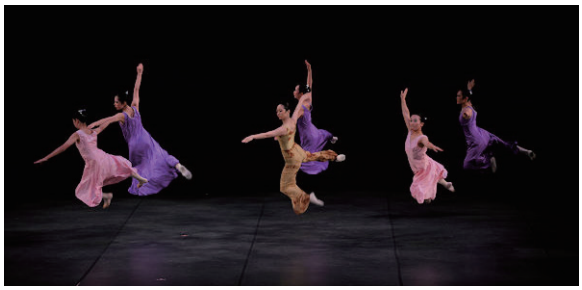
振付に入る前に、子どもたちに「今日、空見た？」とたずねました。見た子もいれば見ていない子もいる、それはいいのです。そして、「今日のお稽古終わって外に出たら、一回空を見てね。」と言います。そして、「学校行くときと、

学校からの帰りに空を見といてくれる？」とお願いします。「そしたら、一日二回は空見られるね？」と。

学校に行くのが楽しい子も楽しくない子も、ちょっと空を見上げれば、少し気分が変わって少し心に余裕が生まれる、そしたらほんの少し自分の世界が広がる、鳥や花のことに目を向けられる、そんな循環が生まれたらいいなと思っています。

実際に空を見上げていると、楽しい発見がたくさんあります。真っ青な空の中に引っかき傷のような三日月を見たり、先日は、なんと彩雲を見ました。空からのひそかなプレゼントを受け取った気分になりました。

子どもたちが空を見上げて自分の少し外側にある世界を知ってくれるように、そして見上げる空がいつまでも平和であるように願ってなりません。



写真は第46回発表会　撮影：中野 良彦

2023年度卒業生アンケート

あなたが神戸大学文学部での学びで得た『最大のもの』は何でしょう?

＊（　）は専修、卒論：は卒論のテーマ

人が無意識に使う言葉に意識を向けて、その人が伝えたいことを深く読み取る力（国文学）卒論：宝塚歌劇における終助詞

私が神大文学部で得た最大の学びは、ものごとを多角的に考えることです。問題に対して様々な視点から考えることで、表面的でない問題にたどりつくことが出来ると学びました（ドイツ文学）卒論：『ダントンの死』における革命と民衆

コロナ下世代の卒業生を送り、新入生を迎えました。

2020年3月、日本でも新型コロナウイルス感染症の流行が始まる。翌月には緊急事態宣言が発出。神戸大学の卒業式・修了式は中止、文窓会主催の卒業・修了祝賀会も中止となる。それから4年。ようやく晴れて卒業・修了祝賀会を開催できる運びとなった。

3月26日　2023年度　卒業・修了祝賀会（LANS BOX 2Fホール）

この年の卒業生の大半を占める2020年度入学生は、入学直後に緊急事態宣言とともに全面オンライン授業に切り替わった学年で、新型コロナウイルス感染症の流行の影響を最も大きく受けた学年でした。学年が上がるにしたがって徐々に「正常化」が進みましたが、未曾有の事態に異質の苦労を強いられたことと思います。しかしそれを乗り越え、無事に卒業・修了を迎えました。

その5年ぶりの卒業・修了祝賀会。入学・進学後に一度も開催されることなく、存在を知らなかった学生がほとんどでした。しかも、午前はポートアイランドでの卒業・修了式、その後は文学部で各専修による学位記授与と、一息つく間もないところでしたが、先生方や学生にも告知してもらった結果、15時過ぎの開始に、多数の卒業生・修了生がかけつけてくれました。用意した食事も、あっという間になくなりました（今の若者世代を反映して？お酒は少し余っていた気もします）。

祝賀会では、長坂文学部長、武藤文窓会会長のお祝いの言葉に始まり、久しぶりに余興として実施した抽選会も、好評でした。その景品は……来年もあるので、そこは参加者のみの公開とさせてください。そして最後には、卒業生代表として、柴田恵理香さん、高山結希さんのお二人からも、一言ずつご挨拶いただきました。

4月10日　2024年度　新入生歓迎会（文学部ロビー）

別れあれば出会いあり、明くる4月には、2024年度の新入生歓迎会を開催いたしました。こちらは昨年から、新型コロナウイルス感染症の流行前とほとんど同様の形で実施できるようになり、100余名の新入生と全専修＋留学生担当の教員、

自分の興味や疑問に対して向き合って、それをとことん探求する姿勢！　社会の役に立つ・立たないで意味のある・なしを判断せず、自分の考える意味のあることを持つ力。人間を人間たらしめる学び。（言語学）卒論：関西方言における複合語のアクセントについて

言葉の整理の重要性への理解。「人文学」があいまいな物を取りあつかう事が多いことで、逆に論理性の担保が何より重要だった。しかし、その論理性を高めることには、別途個人での学修が必要であったように思う。（地理学）卒論：第6次産業化政策に対する生産者の動向

色んな人と（学内、学外問わず）出会い、様々な考え方、生き方に触れられたことが一番大きかったです。自分にはなかった視点を知り、視野が広がりました。より柔軟な生き方が出来るようになったと思います。（芸術学）卒論：BLマンガ表象分析

西洋史の分野を研究する上で、英語の他にドイツ語とルーマニア語を学びました。自由選択の範囲で自分の世界を広げ、研究では言語、文化からグローバルな視野をリアリティの中で得られたと考えます。（西洋史学）卒論：近世ルーマニア地域における印刷文化の展開

神大文学部での学びで得たものは、物事には様々な見方でアプローチすることができ、方法によっては可能性がみえてくる事もあるという事です。先行研究や史料よみに苦労しましたが、一つの史料も色々な見方で捉えることができ、最終的に拙いながら論文を書くことができたのでよかったです。（日本史学）卒論：13世紀までの藤原摂関家の怪異認識

“自らが追求するものと求められるものを折衷する力”社会に出ても役に立つと思います（フランス文学）卒論：19世紀フランス社会における女性像

また各専修の上級生や大学院生、オックスフォード大学からの留学生らが参加しました。今回もお茶とお菓子をいただきながら、教員による各専修の紹介や留学の案内を、新入生らが熱心に聞き入っておりました。

最後に、両会の開催、会場の設営等にあたっては、文学部学生委員の梶尾先生にご尽力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

（両日司会：梅村麦生）

“KOJSP京都支部 !?”神戸オックスフォード日本学プログラム

KOJSP7期生のうちオックスフォード卒業後に京都で暮らす卒業生・3名と彼らのチューターだった神大生とが連絡を取り合って、自称「KOJSP 京都支部」を結成 !? 近況をご報告。

トッティは京大の教育学部に学び、京都人も舌を巻くペラペラ超高速の京都弁で喋りまくっています。エイミーは京都のインターナショナルスクールで小さな子供たちに英語を教え、エロイーズは著名なフランス人写真家のスタッフとして立派な写真展を完成させました。それぞれ日本での暮らしを大いに満喫している様子。日本語力も各段に上達し、日本学を選んだ学生ならではの特性かもしれませんが、世間的な意味でのキラキラした「キャリア」にはとらわれず、生きたいように自分の人生を生きている、という印象を受けます。

3月24日に、7期生2名（あいにく1名は歯痛で急遽不参加）、神大卒業生2名と芦津でインドネシア料理を楽しみました。その後若者たちはトッティの京都大学熊野寮に遊びにいったようです。5月11日は、エロイーズが関わってきたKyotography の写真展の鑑賞に、皆で二条城へ。圧巻の写真展！その後また熊野寮に行き、レーニン全集やヘルメット、拡声器が散乱する魔宮のような談話室でくつろいだのち、すさまじい音量の新歓ライブではトッティの名演奏（プリンセス・プリンセス）も堪能しました。

（芦津 かおり：第6・7期アドバイザリーボード長）

人とのつながりと、意見を交わすことの有意義さです。文学部は多様な専修分野と多彩な人材が揃う場であり、その交流の中で、多くの刺激を受け、自らもまた他者を刺激する関係性を築けたと思っています。この人脈と経験を今後の人生の中で活かせればと思います。（心理学）卒論：人の審美判断における客観的基準

入学のときに、人文学の意義についてお話をいただいた際の、様々な角度から人間そのものや、人間ののこしたものを研究する学問であるという言葉が最も印象的でした。自分がやっていることや、学んだことの意義をしっかり持つことが出来たのは、大きかったのではと思います。（英米文学）卒論：シェイクスピア喜劇における異性装とジェンダー

文学部で学びを進める中で、私は「正しさ」というものは何かということを考えることが出来ました。ヴィトゲンシュタインのゲーム理論や、レヴィナスの道徳論など、考えさせられることは多かったです。専門分野以外のことでもこのように学びが開かれていて、とても有意義な大学生活をおくれました。（社会学）卒論：『団地型』ニュータウンという生活領域

（少なくとも現時点での）人生の基盤となるような思想をみつけることができたこと。自己や社会における出来事に対して、何を是とするか、何を非とするかの指針、軸となる考えを発見できたことは非常によい経験であったと感じる。（哲学）卒論：深層学習は因果判断を消去しうるか

不屈の精神（東洋史学）卒論：北魏末における関隴地域の反乱

（各分野の授業を聞いて得た）知識と知識をつないでゆくこと。そこから知的好奇心を持って研究につないでいくこと。（美術史学）卒論：17世紀オランダ建築画について－ウィレム沈黙公の？が描かれた作品を中心に

ギリシア哲学の師にして人生の恩師、眞方忠道名誉教授への感謝の言葉

2002年3月 眞方忠道先生 御退官

眞方 忠道（まかた　ただみち）

〔1938年11月26日 -2024年1月29日〕日本の哲学者、翻訳家、神戸大学名誉教授。専門はギリシャ哲学、西洋古典学。
1962年東京大学文学部哲学科卒業。67年同大学院博士課程満期退学。秋田大学助教授、神戸大学文学部助教授、教授、2003年定年退官、名誉教授。

1979年～

栗原　隆（新潟大学名誉教授）

本年元旦に、いつものように眞方先生から賀状を拝領、「自由の身、いよいよ御研究とご健筆を期待しております」と励ましのお言葉を賜っただけに、訃報の知らせにはただただ驚くだけでした。

1979年から、神戸大学大学院文化学研究科（博士課程）の院生として5年余り、その後は助手として3年、お世話になったにもかかわらず、何のご恩返しもままならないままであったのは、悔やんでも悔やみきれないものがあります。東北大学大学院（修士課程）から神戸大学へ移るにあたって、仙台の加藤尚武先生から、神戸では、一歳違いの眞方さんのお世話になるよう助言されていた通り、先生から一方ならぬご厚情を賜ったことには、お礼の申し上げようもありません。愚生はドイツ観念論を研究していたためギリシア語はできないので、眞方先生は、わざわざ英訳でプラトンの演習を開いて下さったり、帰宅時ともなると六甲道駅前の寿司政で、お世話になる日々は、思い返すにつけて、頭が下がる思いに打たれます。ただでさえ、先の見えない研究生活の中、血気盛んな年ごろともあって、やんちゃが過ぎることもあったにもかかわらず、眞方先生、そして清水正徳先生がおいで、その都度フォローして下さったお蔭で、あてのない日々にもかかわらず、なんとか遭難せずに、やってこれたのだと、感謝の思いで一杯です。

後年、愚生が新潟大学教養部に赴任し、人文学部へ移籍、家庭を持ち、家を構えた頃ですから2001年でしょうか、西洋古典学会が新潟大学で開催された際に、眞方先生も新潟へお越しになり、お目にかかって二次会をご一緒させて頂くともに、拙宅へご案内したことが、唯一のお礼のようなものでした。心から御礼を申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

二十歳の頃～

坂本 知宏
（大阪電気通信大学 人間科学教育研究センター 准教授）

眞方先生には二十歳の頃から六十三歳（頭はかなり白く、てっぺんは薄い）になる今まで、大変にお世話になりました。妻との出会いのきっかけも先生でしたし、結婚の証人にもなってくださいました。ひどい学生、ひどい弟子だったにもかかわらず、ほとんどまったく怒られたことがありません。先生は一般に人を大切にされましたし、悪いことをされて立腹されても結局は許すことがおできだったようです。なぜそんな風にできるのか? 先生の強さはどこから来るのか? 伊藤邦武先生が「眞方先生はどうしてあんなにお強いの? きみは先生の学生なんだから分からないとダメだ」と私に話を振られたことがあります。そのときは「やはりクリスチャンだからでしょうか?」とかなんとか答えたものの、自分でも意味は不明でした。

先生からキリスト教の話をされたことはほとんどなく、断片的に次のようなことは覚えています。先生のお父上は先生にキリスト教を勧められたことはなかった、自分がひどく迫害されたから；その時代に生まれてその場にいたら自分はイエス・キリストを害する側にまわっていただろう；また別の機会に、「君はパウロについてど

う思う?」と珍しく尋ねられたことがありましたが、「エリートですね」とピントのズレたことをわたしは答え、先生は破顔一笑、「そう、サンヘドリンの議員なんとかかんとか」とおっしゃって、話はそれきりになりました。

先生の姫路のご自宅に初めて伺ったとき、お部屋に通されると、テーブルの上に大きな聖書が開いて置いてありました。先生は少し後から部屋へ入って来られ、「こうしてたら、なんだか読んでるみたいでしょ」と少し照れたようにおっしゃっておられました。

ところで、先生にご指導いただいた古代ギリシア哲学について学問的恩返しをあまりできておりませんので、これまで以上に勉学に励みたいと思います。

1989年～

宇田 佳史（株式会社 成学社）

89年から97年まで、文学部、文学研究科、文化学研究科でご指導をいただきました。

先輩諸兄に混じって参加したプラトン『国家』、アリストテレス『ニコマコス倫理学』などの講読と並んで思い出深いのは、金曜日の F.M.Cornford, “Greek Religious Thought” の演習です。学部生の頃、ちょうどディオニュソス崇拝や密儀宗教を扱った章に差し掛かり、ギリシア宗教の沼にどっぷりはまり込む幸せを味わいました。

先生のご研究は、対話篇の厳密な論理分析に真正面から取り組まれながらも、その終極の先に本当の問題の所在を示唆されるものでした。その一種否定神学的とも言えるアプローチは、確かにプラトニズムの一つの側面を体現された姿勢であるように私には思われました。

師である斎藤忍髄先生のことを、先生はニーチェの'Grenzfigur'(境界的人間)という言葉に重ねて語っておられますが、私はこの言葉は先生ご自身にも当てはまるのではないかと密かに思っておりました。

やがて私もイデア論と呼ばれるようなプラトンの思考と、そこで希求された〈知〉の獲得可能性をテーマに学究の道を志すようになりましたが、震災を転機に外に出ることを選びました。しかし、そんな私にも、年に一度二度お電話した際には、「毎日、少しずつでも読み続けることが大事だよ」とアドバイスをくださるのが常でした。

私にとって先生の存在は、研究室での心地よい談笑のひと時やギリシャ語の予習に明け暮れた日々、ひんやりとした薄暗い書庫の思い出と共に、紛れもなく青春の原郷です。不肖の生徒を師父のような寛やかな心（μεγαλοψυχία）で温かく見守って下さった先生を追慕し、おこがましい喩えですが、帰郷の叶わなくなった放蕩息子の悲嘆を吐露することをお許しください。

1995年～

茶谷 直人（人文学研究科 哲学教授）

眞方先生とは、私が大学院に入学した1995年つまり震災の年以来のおつき合いでした。当時先生は文学部長の要職につかれ日々奔走されていました。しかし先生は、われわれ学生達には疲弊の気配も見せずあの穏やかな笑顔で接してくださいました。私は眞方先生のあの独特な語り口が好きで、ここでお詫びすれば、学友達と先生の話をする時には「あ、マガタですけど悪いけど一つ頼めるカナ」などと物真似をするのが常でした。

思い出の中からここで一つだけお話しします。先生は毎週研究室で院生向けの原典講読ゼミを開かれました。そこではギリシア哲学をはじめさまざまなテクストを読んでくださいました。そこで私は、古代の哲学者たちの言説を理解するには、当時の文化、社会状況、宗教などを総合的に踏まえることが肝要であることを学びました。ただし先生は「これはこうするべき」という教示的な台詞は殆ど口にされません。テクストの読み方やコメントを通じて「身をもって弟子に示す」という仕方で範を示されました。学術の世界では徒弟制度的な面は近年劇的に廃れつつありますが、私にとってやはり先生は「指導教員」よりも「師匠」です。ちなみにそのゼミは夕方に開かれ、当初私はなぜそんな遅い時間に?と不思議でしたが、その訳はすぐに分かりました。読み終えたあと先生は毎週のように「チョット喉を潤しますか」と言ってワインを抜栓されました。コンロで干物を炙り学舎中に心地よい香りが充満したことも。そこでの歓談は楽しいものであったと共に、人間や社会に関わる先生の知見を伺える貴重なひと時でした。

私も今や大学教員の端くれとして当時の先生に近い年齢になり、学生たちを抱えています。先生が私に与えてくれたような恩恵を果たして自分も学生たちに与えられているかと自問するとき、先生の偉大さに気づかされると同時に、少しでも先生に近づきたいという、ソクラテスが人々に求めた「無知の自覚と愛知（フィロソフィア）の心」が喚起されます。

〔シリーズご寄稿・第7回〕

「10年後には」

赤羽　佳奈子
信濃毎日新聞株式会社 松本本社
（国文学専修・2017年度卒）

今年は観測史上最も開花が早かった昨年より2週間遅いものの、4月7日に松本城周辺の桜の開花宣言が行われた。長野県内で育った私にとって、桜は入学式から2週間ほど経った頃に見るものというイメージだった。いつの間にか早く訪れるようになった春に、初めて神戸で過ごした春を思い出す。大学への入学が決まり、神戸に引っ越した10年前。入学式で桜が見られるなんて遠い世界の話だと思っていたので、3月中から咲き始める桜に新鮮な気持ちになった。文学部への登下校の坂から海が見えることも嬉しく、見知らぬ土地で生きる感覚に胸を高鳴らせていた記憶が眩しく映る。

高校時代、古今和歌集で出会った和歌と、神戸大学文学部出身の先生の影響を受けて選んだ大学だった。かつて先生にかけられた言葉を胸に、「言葉」で誰かの人生をほんの少しでも豊かにできるような人になりたいと思いながら大学生活を過ごした。文学部での学びは何もかもが刺激的で楽しく、卒業論文に向かった苦しい時間も幸せだった。授業以外にも「大学生」を謳歌した毎日で、荏苒と送った日々までもが豊かな時間だったような気がしている。

10年後の今、改めて「言葉」について考えてみたい。大学卒業後の進路に悩み、言葉を使う職業にと選んだのがこの仕事だった。新聞記者になり、今年で7年目を迎えた。初めて会う人から話を聞くことも、締め切りに間に合うように原稿を書くことも、全く得意にならない。もっと成長している未来を思い描いていたが、原稿を書きながら一つ一つの言葉にこだわることができているかと言われると、まだ胸を張れない気がしている。右も左も分からずに走りながら仕事をしてきた新人時代に比べ、少しだけ落ち着いて自分の仕事を見つめられるようになった今、思い浮かぶことは圧倒的に反省の方が多い。ただ、普段の生活の中では出会えない人と直接話をする機会をいただけることは非常に楽しく、知らなかった世界を覗ける瞬間はわくわくする。苦労や努力を重ねて生きる人たちが目を輝かせながら語る姿を見ると、その思いを言葉にして誰かに届けたいという気持ちになるのは入社当時から変わらない。

近年はSNSの普及で、文字情報よりも写真や動画などを使って短時間で情報が得られるコンテンツが主力になった。新聞でも写真による情報は重要で、文章を読むよりもインパクトがあって伝わりやすい。一方で、細かい情報を伝えるには言葉で説明する必要があり、表情だけでは伝わらない機微を伝える言葉の役割もより強く感じている。だからこそ時間をかけても読み進めてもらえるような記事を書くため、内容も表現も工夫しなければならない。

大学時代に国文学を学んでさまざまな作品に触れ、百年、千年経った現代でも多くの人の心を動かすことに不思議な感動を覚えた。言葉が残っているからこそ、現代を生きる私たちにも届き、心揺さぶられる経験を伝えている。言葉だけでは伝わらないこともあると同時に、言葉があるからこそできることもあるのだと教わった。改めて振り返る機会をいただいた今、言葉で伝えることを諦めず、最短距離の文章の中にもこだわりを忍ばせた記事を書けるように励まなければと再認識した。

この10年は時代の変化も自身の生活の変化も大きく、自分で選び取ることの多い日々だった。選択肢が多くなると同時に、自分ではどうにもできないことと折り合いを付けなければいけない機会も増えた。毎日何かを学んで成長できればいいけれど、実際は立ち止まったり戻ったりを繰り返している。それでも蓄積してきた経験はなくならないし、触れたことのない世界への好奇心も尽きない。今の自分の考え方には10年前からの積み重ねが影響していると思う瞬間が少なからずある。次の10年後には今よりも少しでも前に進めるように、まだまだ新鮮な気持ちを忘れずに言葉と向き合い、日々を重ねていきたい。

文窓会（文学部同窓会）――会計報告――

令和5年度収支計算書（令和5年4月1日～令和6年3月31日）

【収入の部】		
今年度収入合計		¥1,419,938
	会費納入金	520,000
	協力金	831,000
	雑収入	68,938

【支出の部】		
今年度支出合計		¥3,861,117
事業活動費		¥2,805,258
	会報費	1,504,933
	歓送迎会費	648,858
	文窓賞費	221,860
	ホームページ管理費	8,250
	総会費	305,357
	活動援助費	50,000
	名簿管理費	66,000
協力金費		¥130,000
	学友会費	0
	学術助成費	130,000
事務局費		¥605,619
	事務業務委託報酬	325,200
	家賃・水道光熱費	114,406
	通信費	54,158
	旅費交通費	82,130
	消耗品費	29,725
支払手数料（振込・振替料金）		¥33,100
会議費		¥103,000
渉外費		¥167,640
慶弔費		¥16,500
収支		(-) ¥2,441,179

前年度繰越金	¥20,752,174
今年度収支	(-) ¥2,441,179
次年度繰越金	¥18,310,995

令和5年度財産目録（令和6年3月31日現在）

Ⅰ．資産の部		¥18,310,995
	現　金	18,639
	（ゆうちょ銀行）普通貯金	459,970
	（みなと銀行）普通預金	9,453
	（ゆうちょ銀行）振替口座	1,235,123
	（ゆうちょ銀行）定額貯金	6,003,388
	（みなと銀行）定期預金	1,007,193
	（みなと銀行）定期預金	1,510,257
	（みなと銀行）定期預金	8,066,972
Ⅱ．負債の部		¥0
Ⅲ．正味財産合計		¥18,310,995

（注）従来、新入学生の会費納入金は徴収月である３月に計上していましたが、令和６年４月入学生から徴収方法の変更により４月以降の計上となります。

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、
適正であることを認めます。
令和6年6月12日

会計監査　　三　宅　征　彦　　印

会計監査　　中　畑　寛　之　　印

文窓会役員（2024年9月末現在）

会長	武藤 美也子	1968年卒・国文学
副会長	吉田　浩次	1968年卒・社会学
副会長	西川　京子	1969年卒・西洋史学
幹事長	廣野　幸夫	1968年卒・社会学
常任幹事	日高　健一	1961年卒・芸術学
常任幹事	田中　睦子	1971年卒・芸術学
常任幹事	中川　伸子	1992年卒・哲学
常任幹事	梅村　麦生	2009年卒・社会学
常任幹事	津田　　薫	2010年卒・フランス文学
会計監査	三宅　征彦	1966年卒・社会学
会計監査	中畑　寛之	2001年修・フランス文学
東京支部長	田中　　勉	1972年卒・国文学
東京支部 顧問	中野　　裕	1961年卒・英米文学

文窓会東京支部だより

東京地区文学部同窓生の集い及び木曜会を下記にて開催しました。

開催日時　日時：2024年3月14日（木）

参 加 者　白藤禮幸・青木博子・伊藤順子・絹川ひとみ・田中勉・中野裕

12時から14時30分：昼食会＆同窓会

15時から16時30分：木曜会

1）　同窓会

①　メル友約457名、郵便友50名に案内を送るも不着・郵送未到着・未返事が多かった。
今回の同窓会出席者は６名。前回、第16回は、2022年11月21日に開催したが、その折の参加人数は４名であった。

②　従来から、文学部担当の木曜会にあわせて、同窓会を開催してきたが、今後もこの方針で進める予定。　ご意見あればお願いします。

③　中野裕は、文学部の同窓会の主幹事（文窓会東京支部長）を、約20年つとめていますが、ここで主幹事を田中勉さんにお願いしました。中野は顧問として補佐していきます。

④　今年度から絹川ひとみ（昭和54年卒業　英米文学専攻）さんが会計を担当してくださいます。

2）木曜会

講演会の題目：ZOOM 講演「ヤマトタケルの系譜と出自」

講師：神戸大学大学院人文学研究科　古市晃　教授

今回は、これまであまり顧みられたことのない伝承を中心に、ヤマトタケルの系譜と出自の解明を試み、合わせて日本古代の国つくりと地域の人々の関係を考えました。講演は、大変好評でした。

文学部ホームカミングデイ2024

午後から! 誘い合わせて!

13:00～13:30	受付　文学部A棟1階エントランスホール 会場:文学部B棟132教室
13:30～13:40	開会挨拶、文学部長挨拶
13:40～14:30	卒業生による講演 〔講演①〕英文学の中のスコットランド－言語、合同、分断 （大阪教育大学講師　筒井瑞貴氏 2021年博士課程後期課程修了）
14:30～15:20	〔講演②〕インドにおける日本語学習の黎明期:19世紀末の「神戸～ボンベイ航路」開設を手掛かりに （国立国語研究所教授　Prashant Pardeshi氏、2000年博士課程後期課程修了）
休憩	
15:30～16:00	第18回文窓賞授賞式及び受賞者スピーチ
16:00～16:20	文窓会総会
16:30～18:00	懇親会　瀧川記念学術交流会館 （参加費:3,000円／当日）

KOBE UNIVERSITY

＜併設企画＞
12:50～16:00
文学部A棟1階
エントランスホール
展示：教育研究プロジェクトの活動記録など

■お問い合わせ先
人文学研究科総務係
〒657-8501
神戸市灘区六甲台町1-1
Tel: 078-803-5591

文窓会（文学部同窓会）
ホームページ
https://www.bunsokai.com

＊第18回文窓賞（学生レポートコンテスト）入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。